

自国語（フィリピンの場合複雑だが）で講義をしつつ、特に近年、英語で公表する業績を急激に増やしている。彼らを巻き込むことができれば、そして彼らから社会に対して研究成果を還元してもらえれば、本研究は単に3カ国の地方エリートの姿を学問的に明らかにしただけでなく、3カ国における政治学研究と教育に対しても大きな貢献をしたことになるだろう。

実はこれらの点について、本書の執筆者たちはすでに動き始めていることを、最近になって評者は知ることができた。質的な調査もあわせて、本研究に続く研究がすでに開始されており、国際学会での報告も多数行なわれている。また、国際共著論文や本書の執筆者による英語論文も、公表に向けて努力が重ねられているという。

その意味では、*Bureaucrats and Politicians in Western Democracies* の最終章にあたる比較の章は、たしかに本書にはないが、この研究がさらに発展・拡大する中でまとめられることが期待できる。どのような面白い事実が発見され、それがどのように説明されるのか、今から待ち遠しく思うのは、評者だけではないだろう。

引用文献

- Aberbach, Joel D., Robert D. Putnam and Bert A. Rockman, eds. 1981. *Bureaucrats and Politicians in Western Democracies*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 平山修一・永井史男・木全洋一郎. 2016. 『地方からの国づくりー自治体間協力にかけた日本とタイの15年間の挑戦』佐伯印刷株式会社出版事業部.

村松岐夫. 2010. 『政官スクラム型リーダーシップの崩壊』東洋経済新報社.

曾我謙悟. 2010. 「書評 村松岐夫『政官スクラム型リーダーシップの崩壊』」『季刊行政管理研究』130: 63-67.

太田 至・曾我 亨編. 『遊牧の思想ー人類学がみる激動のアフリカ』昭和堂, 2019年, 376 p.

橋本茉莉*

イギリス社会人類学が生んだ「分節リネージ体系」や「秩序ある無政府状態」[e.g. Evans-Pritchard 1940], エチオピア西南部研究の成果である「戦争と文化装置」[Fukui and Turton eds. 1979] など、東アフリカ牧畜社会における民族誌的研究は、西欧近代が形成してきた固定的・静態的な「民族」観や、「好戦的な野蛮人」というステレオタイプに対する批判的視点を提供してきた。しかしながら、これらの研究成果にもかかわらず、「野蛮」で「伝統に固執」という牧畜民のステレオタイプは、植民地統治や国家による支配のなかで共有され、現在まで受け継がれてきた。本書の舞台となるのは、西欧近代的思想と、上記のステレオタイプ、そして牧畜社会で共有されてきた知識や実践が混交する現代の東アフリカ社会である。この混沌の時代を、牧畜民たちはどのように生き抜いているのだろうか。執筆者らの粘り強いフィールドワークからみえてきたのは、複数

* 立教大学文学部

の価値規範や実践に翻弄されながらも、それらを使いこなしながら自らの生を紡いでゆく人々の姿である。

本書は序章に加え 15 章、3 部構成となっている。序章では、グローバル化や国家の干渉、気候変動、近代化といった東アフリカの牧畜民が共通して経験する問題と、そのなかで見出された牧畜社会に共通する特徴が示唆される。本書の目的は、東アフリカの牧畜民の生活や考え方の特徴を明らかにするとともに、彼らがいかに変化に向き合い、翻弄されながらも自らの生を紡いでいるかを見出し、そこに存在する「遊牧の思想」を提示することにある。「遊牧の思想」を読み解くヒントとなるのは、牧畜民の「徹底した個人の自主性といさぎよさが、自在に行動する柔軟やしぶとさと複雑に両立している」(p. 10) という特徴である。

第Ⅰ部「牧畜という生き方」では、牧畜民のコミュニケーションや家畜をめぐる形成される人間関係、集団間関係が描かれる。牧畜民の際限のない物乞い(1 章)あるいはねだり(2 章)は、単に個人間の利害をめぐる闘争ではない。それは、「コミュニケーションにコミュニケーションを接続する」(p. 25) という特徴をもつ半永久的なコミュニケーション創造の場であり、個人が一人前の人間となるための社会化の過程であり、それゆえに「社会の秩序」の創出にもつながるものであることが指摘される。家畜の所有(3 章)をめぐる人々のふるまいからは、つねに他者からの交渉の機会にさらされながら存在している「自己の所有権」の在り方がみえて

くる。他者との交渉を促す家畜の交易の発展(4 章)は、単なる経済活動ではなく、人間集団同士の信頼関係や協働関係を促進し、難民のセイフティ・ネットワークを形成していた。個人と「その場性」に価値判断の基準を置く牧畜民に対し、農耕民(第 5 章)は、祖霊やパターン化された物語という「外部」を参照しながら不幸の経験を解釈する。

第Ⅱ部「紛争を乗り越える」では、国家権力に対する戦略や暴力に対する牧畜民の対処の方法が描かれる。市場経済と生業経済の併存化や、伝統組織にとらわれない新しい共同体の成立(6 章)、そして傷や病の治癒行為を通じて個人と社会の経験を非暴力化する方法(7 章)からは、周縁化された牧畜民たちの創造的営みが見出される。また、戦いの下であっても民族間を越えて存在する個人間の紐帯(8 章)や、在来の「男らしさ」という規範を越えて戦いに向かうことをやめる個人の姿(9 章)からは、共同体の規範を越えた個人の主体的行為の果たす役割が示される。一方、戦後社会を生きる農耕民は、賠償の支払いと因縁の解消という規範を逆手に取り、規範にそって「社会の秩序」の再建を拒否するという態度を取る(10 章)。これらの事例からは、周縁化された牧畜民が時として伝統を捨て、民族を越えたつながりを創り出しながら国家に寄らず、時として利用しつつも自らの生を生きる／生き直す知略と実践が描かれる。

第Ⅲ部「グローバリゼーションに向き合う」では、アフリカを越えた世界規模で展開する運動・プロジェクトや経済活動のなか

で、牧畜民がどのように個々の状況を生き抜いているのかが描かれる。〈外部〉が持ち込む動物愛護の価値と〈地域〉の論理の双方を組み合わせる「便宜的」なマサイ（11章）や、アフリカの牧畜民のステレオタイプを利用しながら観光業に携わり、欧米人女性と「マサイ」として「恋人業」を営むサンプルの人々が最後に行きつく〈地域〉のありよう（12章）からは、グローバルな動きに翻弄されつつ地域社会との結び付きとともに生きる人々の姿がみえる。人々が営むミクロな生業活動からは、生計を維持するための多様な対処戦略（13章）や、親族間で生ずる駆け引きや葛藤（14章）が見出された。そして植民地期以降に整備が試みられた家畜市場の歴史からは、「地域」にも「外部」にも括ることのできない牧畜社会に関与する多様なアクターの存在が指摘される（15章）。以上の事例からは、グローバル、ローカル、そして親族や個々人の思想と行動規範が複雑に入り混じるなかで、それを組み合わせたり使い分けたりしながら目の前の状況と向き合う人々の姿が明らかにされた。

以上のとおり、いずれの論考も、実に多様な牧畜民・農耕民の姿を詳述している。そのユニークさを限られた紙幅で紹介するのは不可能なため、ぜひとも実際に本書を手にとることをお勧めする。その多様さが「遊牧の思想」を特徴づけるのを困難にしているということもあるが、ひとつの分析概念や理論で語りえぬ事例に目移りしてしまうのもまた、すぐれた民族誌的研究のつねであろう。以下では、社会変容を生きる新たな人間像の提出、

実践に基づく思想の抽出方法、そして本書が抱える課題の3点に絞って本書の評価を論じる。

まず功績として挙げられるのは、現代の牧畜社会が周縁化されていった過程が示される一方で、人々自身が自らのイメージを相対化し、文脈や目的に合わせて柔軟にこれらを受け入れたり、回避したり、あるいは逆手に取ったりする様子がありありと描かれている点である。微視的な描写からみえてくる人々の姿は、時代に翻弄される脆弱で受動的なものではなく、かといって過度に主体性が強調された戦略的個人でもない。それは、構築された像とその像からの脱却を同時に生き、受動と能動の間を行き来しながらアフリカの社会変容を生きる人々の新たな姿である。

さらに特筆すべきは、人間の実践の背後にある思想の抽出方法である。本書で描かれているのは、一般に思想という語から想起されるような抽象的な観念世界ではない。執筆者たちが一貫して着目しているのは、ミクロな人間関係や個人の思想、そして人間同士の相互行為や語りの場である。たとえば、社会の規範の生成へとつながる対人コミュニケーション術（1章）や、集合的な問題としての「個人の所有」（3章）は、観念というよりも、あくまでも彼らのプラクティカルな問題として現前し、日々の行為や他者との相互交渉のなかで創造され続けている。すでに共有されている規範を参照するのではなく、その場でパフォーマンスに紡がれ、立ち現れては消えるものを「思想」として捉えるのは困難極まりないであろう。これを捉えること

を可能にしたのが、執筆者らが長年にわたって牧畜民たちと築いてきた濃厚な関係である。本書の行間から伝わってくるのは、執筆者らがフィールドで直面した困難や怒り、やるせなさ、そして興奮である。この経験の蓄積から描かれているのは、静態的・抽象的な価値体系ではない、集団として生存するための論理かつ実践として存在する、いわば「生きた思想」であった。

しかしここで疑問として浮かぶのは、本書で「遊牧の思想」として挙げられている人々の特性は、果たして東アフリカ牧畜民「の」ものなのだろうか、という点である。柔軟で融通無碍な態度は、アフリカのみならず激動の時代を生きるあらゆる人間集団に求められるであろうし、このようにふるまうことができた集団だけが現在まで生き延びているということもできよう。たしかにこの特徴は、一部で農耕民との対比で描かれているものの、牧畜民「の」思想と位置付けるためには、さらなる比較検討が必要ではないだろうか。

しかし、だからといって評者は牧畜民特有の思想など存在しないと考える。かつてエヴァンズ＝プリチャードが農耕民アザンデと牧畜民ヌエル [Evans-Pritchard 1937, 1956] の民族誌で対比的に描いたように、災いの原因を人間に帰するアザンデと、神に帰するヌエルの間には、たしかな違いをみることができる。その違いを形作るもののひとつが、生業に基づいて築かれる人間関係や人—神関係、そして超自然的な力を經由して形作られる財（農作物、家畜）をめぐる考え方だろう。本書の随所には、人間の窮状や苦

境、癒しとともに存在する神的存在への言及が描かれている。牧畜社会では時として家畜と同一視される神的存在や霊観念は、自己と他者の関係や、家畜の所有と分配、そして自集団と他集団、社会変容の受け止め方にも大きな影響を与えているはずである。この点を掘り下げていくことで、「牧畜の思想」に新たな側面を付け加えることができるのではないだろうか。

とはいえ、本書の目的は、牧畜民のユニークネスを描き出すことのみではなく、「私たちの生き方に新たな指針をもたらす」(p. 10) ことでもある。「自己責任」や「自己実現」、そして「自己同一性」など、過剰な自己の在り方に日々苦しめられている私たちにとって、即興的に演出される牧畜民の自我や他者との関係の築き方は、時として息苦しいこの社会で生き残る足掛かりを確かに与えてくれる。

引用文献

- Evans-Pritchard, E. E. 1937. *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*. Oxford: Oxford University Press.
- . 1940. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*. Oxford: Clarendon Press.
- . 1956. *Nuer Religion*. Oxford: Clarendon Press.
- Fukui, K. and D. Turton, eds. 1979. *Warfare among East African Herders*, Senri Ethnological Studies 3. Osaka: National Museum of Ethnology.